

武蔵野日曜集会

世の光

――ヨハネ伝第8章12～20節――

1994年12月4日

小池辰雄

聖書にきたれ 初めに靈言ごさる 魂之靈の世界 靈の念は生命・平安 世の光 無者キリス
ト 何処より来り何処に往く 光の子 夢の世界

【ヨハネ8・12～20】

12 斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』¹³ パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』¹⁴ イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何処より来り何処に往くを知る故なり。汝ら是我が何処より来り、何処に往くを知らず。』¹⁵ なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。¹⁶ されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。¹⁷ また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。¹⁸ 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う』¹⁹ ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』²⁰ イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

●聖書にきたれ

私の母は失明してから、相対的な現実においては非常に悲惨な闇の世界でした。母が信仰に入る動機をつくったのは私ですけれども、もともと浄土真宗だった。浄土真宗というのは、弥陀の本願という他力本願の宗教ですから、福音に非常に近いんです。

このあいだ、伊豆から帰ってくるとき、電車の中で若者どもが5、6人、大きな声で騒いでいた。大体、みなのもとの共同の電車の中で、あたり知らずに騒いでいるのはとんでもない。今の若者がそういう非常識なのは、日本は三等国だと言いたくなるくらいです。ドイツではそんなことは絶対にない。ドイツでもアメリカでもそうだと思います。やはりキリスト教の伝統がある国は違う。その点で無宗教の日本は精神的に一番ダメではないですか。今



の教育そのものがなっていない。先生方が魂の世界を本当の意味において持っていないから、日本というのは情けない。だから、我々、福音にある者はそういった闇の世界に対して本当の光をもつて戦っていかねばならない。我々自身が本当に光でなければならぬということを中心から思わざるをえません。仏道でもキリスト道でもいい。とにかく、絶対的な世界を持たないというのが大方ですから、本当に情けない。どうぞ、あなた方は、いかなる人にでつくわすか知りませんが、

「聖書にきたれ」

と言って、自由な伝道を、一対一の伝道をなさってください。大体、普通の本屋では聖書を買っていないから、本当に情けない。我々の存在そのものが非常に伝道の使命を負っていますから、そういう自覚のもとに生きていかれるようお願い致します。

●初めに霊言を告ぐる

それではヨハネ伝8章の12節から入ります。

12 斯てイエスまた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は

暗き中を歩まず、生命の光を得べし』

ヨハネ伝は非常に「光」という言葉が多い。パウロは「義」という言葉が多いけれども。

ヨハネ伝の最初の方に、

「太初に言あり、言は神と偕にあり、言は神なりき」(ヨハネ1:1)

とある。この「ロゴス」というギリシヤ語を「言」と日本語に訳してしまうと、おもしろみがなくなってしまう。「ロゴス」というのは「語る、言う」という意味の「レゴ」という動詞からきている。昔は「言う」という言葉は、漢文では「道」を訓読みで「道う」と読んだ。だから、

「太初に道あり」

と訳してあるのも結構です。

「神さまの語らいがあった」

ということですよ。

聖書は創世記から黙示録まで、これは神の言です。言は、音におけるところの神さまの聖意の表現です。行いにおけるところの表現が神の業になる。表現の形態が言であるか業であるかということ、もともとは神意、神の御意なんです。神意のないところには言も業もない。言の元は神意、神の意です。初めに神の意が土台ですから、意が表現されて、言になったり行いになったりする。言は表現の一つの形なんだ。我々お互いも言葉によらなければ通じないわけです。

ところが、言葉が要らない世界がある。

「以心伝心」



という。心を以て心に伝えるという。何も言わなくて、心が通ずる。お互いに目と目と見合って、何も言わなくても、その気持が通ずる。人を憎んでいると、嫌っているその目つきで分かる。愛すれば、愛する目つきで分かる。目つきというものは妙なものだ。目というものは不思議なものだ。うれしい目と悲しい目と怒っている目と疑っている目と、色々な目つきというのがある。これは妙なものだ、目玉の構造は同じなんだけれども。

だから本当は、「初めに言あり」ではない。

「初めに意あり」

だ。根源には意がある。心の世界、霊の世界、魂の世界です。本当の言は霊言なんです。霊の土台のない言葉は空しい。明治5、6年頃の訳に、

「初めに霊言いざる」

という訳がある。大したものだ。

「心は万物のもとであり、創造のもとである」

という仏教の坊さんの言葉もある。

●魂之霊の世界

要するに「魂之霊」の世界です。霊は「ひ」と読む。神さまから霊を受けることを受霊という。我々は聖霊を受ける。これが正に受霊なんです。十字架の贖いを信じて、その土台のもとに聖霊を受ける。聖霊のバプテスマとは受霊のことです。

「聖霊を受けるまではキリスト者でない」

とパウロがローマ書8章で言っているとおります。十字架を本当に受けとらないと、本当の意味で、また聖霊が受けとれない。十字架と聖霊は離してはいかん。キリストはルカ伝12章で

「我は火を地に投ぜんとて来れり。此の火すでに燃えたらんには、我また何を
か望まん。されど我には受くべきバプテスマあり。その成し遂げらるるまで
は思い逼ること如何許ぞや」(ルカ12・49～50)

と言われた。「火」とは霊のことなんです。「受くべきバプテスマ」とは十字架のことです。

「十字架に架かって贖罪をしたら、今度は、お前たちは祈って待つていろ、聖

霊がくだるぞ」

と、ちゃんとキリストはそれを言っただけです。十字架の土台に初めて聖霊がやってくる。十字架をいい加減にした聖霊教なんかはダメです。また、十字架ばかり言っているのもダメ。十字架と聖霊は分けることができない関係にあります。

十字架に架かったら、今度は復活のキリストが霊的な生命をくださる。「復活」という言葉は妙な言葉だ。復た息を吹きかえたということではない。本当は靈活なんだ。キリストは霊に活きる。そうすると、今度は聖霊がくだってくる。息を吹き返して復活したので



はない。次元の違った凄い世界に入って、それが現れる。御霊のキリストです。

●霊の念は生命・平安

ローマ書8章に、

「この故に今やキリスト・イエスに在る者は罪に定めらるることなし。²キリスト・イエスに在る生命の御霊の法は、なんじを罪と死との法より解放したればなり。³肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり、旧約の律法を本当に守れば、そうすれば活きるのだけれども、それは誰も守れない。これが本当に実践できたのはキリストだけです。キリストは旧約の律法以上の世界を持っているから。」

即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣し、肉に於て罪を定めたまえり。
⁴これ肉に従わず、霊に従いて歩む我らの中に律法の義の完うせられん為なり。

とはつきり書いてある。この「義」という言葉は「正義」と訳してはいかん。神の御意の世界を義という。

「神の義は福音のうちにあらわれた」

とはそのことです。

⁵肉にしたがう者は肉の事をおもい、霊にしたがう者は霊の事をおもう。⁶肉の念は死なり。霊の念は生命なり、平安なり。」(ロマ8:1～6)

生まれつきの我々の思いは死だという。御霊におけるところの思いは生命であり平安である。これは「平和」でなくて「平安」です。平和というのは人間のお互いの関係のこと。平安というのは神さまとの関係が立っていることが平安です。平安のない所には本当の平和はない。そんなことは普通の人は知らん。

十字架によって贖われて、そして聖霊が来ている、この十字架・聖霊の世界を本当に身につけていると、これが本当の平安なんです。運命・環境がどうなろうと、そんなものに決して動かされない。打ち勝つ。絶対恩寵の力の世界、光の世界だからね。

ローマ書8章にちゃんと書いてある。

「⁸また肉に居る者は神を悦ばすこと能わざるなり。」

「肉に居る」ということは、生まれつきの我々は神さまを喜ばすことができないということ。

⁹然れど神の御霊なんじらの中に宿り給わば、汝らは肉に居らで霊に居る。

キリストの御霊なき者はキリストに属する者にあらず。¹⁰若しキリスト汝らに在さば体は罪によりて死にたる者なれど霊は義によりて生命に在る。¹¹

若しイエスを死人の中より甦えらせ給いし者の御霊なんじらの中に宿り給わば、キリスト・イエスを死人の中より甦えらせ給いし者は、汝らの中に宿り



たもう御霊によりて汝らの死ぬべき体をも活かし給わん。」(ローマ8:8～11)

とパウロははつきり言っている。私たちは死を知らない。「死」という言葉は要らない。

私は死という言葉は嫌いだ。死なない。私はもう90歳だから、人生の最後のところに来たわけだ。いつ逝くか知らんけれども、その時は、

「小池先生は死んだ」

なんて言っては困る。

「あちらの方へ往って生きました。往生しました」

と言ってくれなければ。他界に往って、別な世界に往って、往生している。

死に完全に打ち勝っていることは、パウロは別のところでも言っている。ローマ書は凄
いから、時々読んでください。

「ローマ書は新約聖書のダイヤモンドである」

と内村先生が言っていた。

●世の光

聖書で、「世」というときは罪の世、世ということです。世というのは暗く、本当の光をもつていない。

「世の光なり」

とは

「闇の光なり」

ということです。我々は太陽で光というものを知ったわけだ。地球は太陽に照らされ、太陽の光熱を受けて、地球上のものはみな生かされている。太陽の光熱のお陰で生かされている。いろいろなものが見えるのは、太陽の光のお陰です。地球にとっては太陽は絶対的な存在です。太陽がどこかへ行ってしまったらお終いなんだ。

だから、「太陽神」というのがある。太陽を拝む。太陽を拜んだって悪くはない。とにかく、すべてがただ当たり前のような顔をしているのが一番いかん、感謝感激の気持ちがなかったら。ところが、当たり前のような顔をしているのが大方だね。だから、聖書にぶつかった人はみな非常に深い使命をもっていますから、そのおつもりで。

讃美歌87Bに、

「恵みの光はわが行き悩む

闇路を照らせり、神は愛なり。

我らも愛せん、愛なる神を。

うき雲おおえどみ顔の笑みは

さやかに照りいつ、神は愛なり。

我らも愛せん、愛なる神を。



憂いの時にも望みを与え、
慰め給えり、神は愛なり。
我らも愛せん、愛なる神を。

ものみな移れど恵みの光
とわにぞ輝く、神は愛なり。
我らも愛せん、愛なる神を」

とある。また、詩篇27篇に、

「エホバはわが光、わが救なり。^{すくい} われ誰をおおそれん。エホバはわが生命の
ちからなり。わが懼るべきものはたれぞや。^{おそ} われの敵われの仇なるあしきも
の襲いきたりてわが肉をくらわんとせしが躓きかつ仆れたり。^{つまず}」(詩篇27・1、
2)

これは素晴らしい言葉だね。

「エホバはわが光、わが救なり……」

とは、我々にとっては、

「キリストはわが光、わが救なり。われ誰をおおそれん。キリストはわが生命のち
からなり」

ということですよ。

●無者キリスト

「キリスト教」とよく言う。私は「教」の字が嫌いだ。キリスト道です。教えではない。

「私は何も言えない。神さまが言わせているだけだ。私は為ることもできない。」

ただ、神さまの力によっている」

とキリストは言っている。だから、私はキリストのことを「無者」と言っている。何も無いひとです。キリストは無者、

「無者キリスト」

です。私もまた何もものでもない。キリストが一切である。

「キリストの無者」

である。我々はそういうことです。無者というのはそういう意味です。

聖書は大変な本です。聖書が本当は一番面白い。聖書が面白くならなければウソですよ、

「聖書は難しい」

なんて言っているうちは。ちよつとも難しくはない。自分にピシャツとくる句を中心にして、
段々展開していく。頭で分かっただけです。

「分かる」

という言葉はダメだ、

「食べました、飲みました、受け取りました」

ということではなければ。「分かる」という言葉は、頭でもって判断するような言葉だからよくない。

「何も分かりません。ただ食べました。受け取りました。飲みました。力を受けました」

というわけです。

あなた方は大体、口語訳の聖書を読んでいらつしやるのかね、私はいつでも文語訳なんだけれども。口語訳では、キリストが

「あなた方は」

なんて言っている。

「お前たち」

でいいんだよ、キリストは権威をもって語ってらつしやるんだから。「あなた方は」なんていう訳はおかしい。なぜ「お前たちは」と書かないのだろうか。「あなた方」なんて言われたら、くすぐったくなってしまう。だから、文語の

「汝」

という言葉はいい。とにかく聖書は火花が散っていますから。

●何処より来り何処に往く

ヨハネ伝8章にもどります。

¹² 斯てイエスマた人々に語りて言い給う『われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず、生命の光を得べし』

「生命」は「プシヘ」でなくて「ゾーエ」「永遠の生命」です。

「滅びない生命の光を得べし」

ということですよ。

¹³ パリサイ人ら言う『なんじは己につきて証す、なんじの証は真ならず』

普通の判断からいうと、自己弁護みたいなのがヘタすると証で、自己弁護は自己が中心になっているから、パリサイ人の言うことは普通の意味では本当なんです。けれども、キリストは自己が無い、私の無い無私のひとですから、キリストは自分のことを証しても、それは真理ではないのではなくて、それは本当に真理なんです、本ものなんです。

¹⁴ イエス答えて言い給う『われ自ら己につきて証すとも我が証は真なり、我は何処より来り何処に往くを知る故なり。汝ら是我が何処より来り、何処に往くを知らず。』

キリストは神さまの所からやって来て、また神さまの所へ帰っていくんだと。

¹⁵ なんじらは肉によりて審く、我は誰をも審かず。



汝らは人のことを相対的な現実でもって審いているからダメだと。

「我は誰をも審かず」

とは、

「人間は自分でもって自分が審かれるようなことをするから審く必要がない」

ということ。

16 されど我もし審かば、我が審判は真なり、我は一人ならず、我と我を遣し給いし者と偕なるに因る。

「神さまと一緒にだから自分の証は本ものだ、いわゆる自己でもって語っているのではないんだ」と。

17 また汝らの律法に、二人の証は真なりと録されたり。

これは申命記19章15節に書いてある。

18 我みずから己につきて証をなし、我を遣し給いし父も我につきて証をなし給う」

だから、二人なんだ。

「父なる神と二人でやっているから本当だ。神さまの言葉によってやっているのだから、勝手に自分でやっているのではないんだ」と。

19 ここに彼ら言う『なんじの父は何処にあるか』イエス答え給う『なんじらは我をも我が父をも知らず、我を知りしならば、我が父をも知りしならん』

20 イエス宮の内にて教えし時これらの事を賽銭函の傍らにて語り給いしが、彼の時いまだ到らぬ故に、誰も捕うる者なかりき。

キリストは、神さまのことを「父」と言つて、自分は「子」なんです。この「父子」ということは——「では、母は何か」なんて、そんなことを言っているのではない。もし、強いて言うならば「母」とは聖霊のことです——「父と子」というのは、非常に人格的な思いがそこにある。人格関係です。肉体的な父と子ではない。これはもちろん霊的な意味です。まあ、普通の人に「霊」なんて言つても、分からないわけだね。聖書で「霊的」というときは「聖霊」ですから。神の霊、キリストの霊、聖霊、これは三位一体であるというのはそのことです。人格と言つても、「霊格」と言つてもいい。霊格という言葉はないけれども、そうなんです。霊的人格、霊におけるところの人格です。いわゆる人格ではない。もつと次元が高い。

●光の子

『レ・ミゼラブル』に出てくるあの司教さんみたいなものです。『レ・ミゼラブル』というのは大変な小説だ、世界の第一級品だ。読むと涙がでる。とにかく、皆さん、くだらないものを読まないで、第一級品を読みなさい。第一級のものを熟読した方がよほどいい。現



代の人たちは古典的なものから遠ざかって、非常に薄平くなってしまった。第一級の文学を読まなくてはいいかん。

チャップリンの映画『独裁者』の中に出てくる台詞（せりふ）に6分間演説というのがある。

「人生とは自由で美しくあつてほしいものなのに、私たちはそうした生き方をなくしてしまった。醜い欲望が人々の魂を毒し、世界に憎悪のバリケードを築き、私たちを悲惨と流血に追い立てた。私たちはスピードを発達させたが、私たち自身を閉じ込めてしまった。豊富に物を供給する機械は私たちに物足りなさを反対に植えた。私たちの得た知識は私たちをシニカル（皮肉）にした。私たちの賢さは私たちを気難しく冷淡にした。私たちは余りに多くを考えすぎ、感じ取ることが余りにも少なくなっている。機械よりも私たちに必要なのは人間性、ヒューマニティーなのだ。賢さよりも必要なのは、親しさと優しさなのだ……」

これはなかなかいい台詞です。チャップリンはヒットラーと同じ年月に生まれている。不思議なものだ。

私たちは「エン・クリスト」「キリストの中」に入ると、キリストの光が自分の中に入ってきて、そして、光ならざるを得なくなる。太陽の光とまた違った光だ。霊眼、心眼でものを見ていく。

「眼光紙背に徹する」

という。作者以上の世界をその作者の文字の奥に読んでしまう。

漱石さんのものを読んでも、それは素晴らしいけれども、しかし、足りない。漱石の奥を読んでいく。日本の作家はそういったもの凄い霊的な世界をもたないから、日本の文学ではもの足りない。とにかく、世界的な第一級品をお読みなさい。そしたら、楽しくてしょうがない。『レ・ミゼラブル』、『ファウスト』、『神曲』。トルストイの『復活』もいい、特に終りの方カチューシャのところは。

「カチューシャかわいいや別れのつらさ」

という歌は昔、帝劇でやった劇中の歌として松井須磨子（1886～1919）が歌って、日本全国でおおはやりになった。

世の光、闇の世の光ということ。我々はエン・クリストで光の人にされている。この光はいかなるものも消すことができない光です。我々は「光の子」なんだ。もう、平伏してありがたいだけです。行き詰まりを知らんということになる。

●夢の世界

太陽の光が水滴に当たると虹になると。光は色をもたない。無色の光なんです。無色の光は無限の中身をもっている。人の眼には七色に見える。虹がそうだ。虹がよく顕している。虹は二重に出る。「虹霓」という。中国人は「虹」を雄の竜、「霓」を雌の竜というように見



る。七色の光が一つになったり、一つの光がまた七色になったりする。そういうことを歌っているのがシラーの詩——「散歩」という詩だったかな——の中にもある。

人が歌っている時に、それを聞きながらその世界に、そういう心境に入らなければダメですよ。歌い方がうまいかまづいか、ということではない。その世界に入る。それが本当の聞き方というものです。歌というものは素晴らしい。詩篇はみな歌ったんだ。あれは詩篇ではなくて歌篇なんだ。ユダヤ人はあれをみな歌う。

ある神秘家が

「闇の中ほかえつて本当に光が見える」

と言った。

「牢屋に入れられても、ちよつとも暗くない。自分は本当の光を見えています」

と。「光を見る」というのは、光によつて光を見るんです。こっちの目玉に光があるわけではない。

祈りというのは、外側から祈つてはダメですよ、祈入、祈り入らなくては。祈りながらその世界に入らなくては。だから、

「祈りたることは聞かれたりとせよ」

とあるでしょ。聞かれてはいる現実として祈っていないか。

「祈ったけれども、果たして聞かれるだろうか」

なんて、そんなことを思っている祈りはダメなんだ。私心のない祈りは必ず聞かれる。今現象していないように見えるけれども、必ずいつかは現象する。根源現象はその祈りの瞬間にきている。

「…であろう」

の世界ではなくて、

「…である」

という霊的な現在というものをちゃんと持つてないといかん。

「キリストに在る」「エン・キリスト」

ということは素晴らしい現実です。エン・キリストだったら、もう何がどうなろうと、一向差し支えない。エン・キリストの人は非常に創造的になる。ものを造り出していく。

本当の無の世界は、無から創造するんです。普通の人は無ということが分かってないね。これは一番素晴らしい根底の現実なんです。そうすると、無限無量が出て来る。無は無限、無量に展開する。

これは冥想していると凄いことになるよ。私は夢の世界でよくそういうことがある。夢が夢でない。夢の世界が霊的な現の世界になつてしまう。霊的現実の世界になる。それは楽しい。そういう不思議な夢を私は時々見る。醒めると、逆にがっかりしてしまう。なぜ、眼が醒めたかと。

